

納西文化の色彩における重層性

吉川 文子[※]

納西族は一般に白を崇拝する民族であると言われている。しかし色彩文化の観点から、一概にそう言い切ることはできない。白を崇拝するのは納西文化の表層部分であって、その奥には何層もの文化の積み重ねが存在するのである。

1. 東巴教

東巴教は一種の原始宗教と言われ、その中心は自然崇拜・靈魂観・祖先崇拜である。伝説の始祖は“丁巴什羅”。東巴教の巫師は「智恵なる者」という意味の“東巴”（永寧では“達巴”）と言う。特に系統だった教義や寺院・廟、組織団体はなく、信者はほとんど一般の労働者である。東巴は世襲相続で、個人の家に招かれて東巴の儀式を行い、その報酬を貰う他に何の特権もない。東巴にも能力の有るものに格差はあるが、教主はいない。儀式の道具は、神の像、法権（刀と二股に分かれた枝）、鈴、太鼓を打つバチ、五幅冠等である。儀式は道教に似ており、極めて原始巫教的である。人間の幸福は善神によってもたらされ、災いは鬼によって生じるものと考えられている。その善神の力と鬼の力を上手く東巴が調節するために儀式を行い、儀式で使われる経典が東巴経なのである。

東巴経は、1300以上の図画文字・象形文字・標音文字の哥巴文の3種類の象形文字で記された東巴文で書かれている。儀礼に関する宗教の他、社会科学と自然科学の広範囲に渡り、納西族の祖先からずっと積み重ねられてきたものが記されている。その軸は、万物に靈魂が宿していると考えられる多神崇拜・自然崇拜・祖先崇拜の三つであると一般に言われている。

※筑波大学比較文化学類

東巴教は外来の諸宗教の影響を結集して出来上がった。中国の研究者は、ボン教、チベット仏教（ラマ教）禅宗、道教等が大きな影響をもたらしたとよく書いているが、特にチベット伝来の宗教に関しては定義が曖昧であり、どの宗教のどの部分が東巴教に影響したのかははっきり示したものが少ないものの、このような外来の宗教は、大きく分けてチベット経由のものと漢民族経由のものに二分できる。注意すべき点は、研究者がよく言う東巴教に影響を与えたラマ教とは、「7世紀ごろインドで栄えた大乘仏教がチベット地方に移入されて、チベット仏教として発展し、更に種々の返還や盛衰を経て現在にいたったもの。」¹ということである。

2. 納西族は本当に「白」を崇拝視しているのか

一般に納西族は「白」を崇拝する民族だと言われている。これは東巴経に「白は善・光明を表し、黒は悪・暗黒を表している」と記されているからであるが、果たしてこれは本当なのか。まずはその根拠とされる《黑白戦争》の解釈を見てゆこう。

白庚勝氏のまとめたところによると《黑白戦争》の翻訳は五つなされているが、東巴経の象形文字を翻訳する段階で若干の違いがどうしても出てきてしまうようだ²。それを表にすると以下の様になり、「黒」と「白」の扱い方に関しては、その対立がハッキリと示されているものと、そうでもないものに翻訳の段階で大きな差が生じている。

では《黑白戦争》を納西族の研究者はどの様

図表1 <黒白戦争>の解釈の違い（白庚勝氏の論文をもとに筆者が作成したもの）

	<ul style="list-style-type: none"> ・楊世光整理「黒白戦争 ・周慰蒼・趙銀棠整理 「東岩西術 一黒白争斗的故事」 ・和正才訳・木易搜集整理 「黒白戦争」 	<ul style="list-style-type: none"> ・和芳・和正才訳述，李即善・ 周汝誠訳「黒白戦争」 ・久高恒読経，和志武述訳 「動埃蘇埃 — 動族和蘇族的結仇戦争」
共通部分	<ol style="list-style-type: none"> (1) “黒”と“白”の両方世界の描写 完全に一致する。——つまりド族の世界は全てが白く，光明の世界であること。 (2) “黒”と“白”は二つの敵対する部族であること。 (3) “黒”と“白”の戦争の性質は仇うちであること。 (4) 戦争の規模とその場面の描写が大体一致すること。 (5) 戦争の結果は“黒”が“白”に勝利すること。 	
争いの原因が違う	太陽と月の争奪が原因。	太陽と月の創造を奪い合い，子供が殺された仇うちが原因。
“黒”と“白”に対する作品の傾向が違う	黒が抑えられ白が高められる。	比較的穏健で，ド族が勝利を収めるが，彼らの取った残虐行為に自らを責めるもの。
手法が違う	作品が芸術・哲学に重点が置かれ，整理した者の手を加え，合理化した痕跡が有り，状況は複雑で話に山が有り，非統一的なものや対応しないところも筋の通ったものになっている	道徳・歴史に重点が置かれ，真実味があり，状況も簡単で流れと傾向に不自然さを残したままにある。
戦争の結果の違いがある	ド族は徹底的な戦争を行いシュウ族に勝利したもの。次にシュウ族が太陽と月を開放して両部族は結束した	ド族がシュウ族に徹底的な戦争を行った後，黒と白は部分的に共通すると強調している。

に解釈しているのか。

楊福泉氏は、東巴経の宗教性から白は清廉潔白、黒は邪悪を意味すると見なし、それは納西族の祖先古羌人から白を崇拜しているからだと述べている。例えば白い旗は和平のシンボルであり、白い石の崇拜、葬式の際に死者には白い服を着せる点などは羌族と納西族と共通している。また、同じく古羌人の流れをくむチベット族も白を崇拜している。ボン教も白を崇拜するものであるので、そのボン教が納西族に伝播したことから、白は清廉潔白、黒は邪悪というカラーシンボリズムが東巴経に現れているのも当然である。また北方遊牧民も白を崇拜している所を見ると、古羌人は西北から来た遊牧民なので、白は清廉潔白、黒は邪悪という観念は古代遊牧民の宗教の特性であり、これは昔の遊牧民が黒い暗黒に恐れを抱き、白い光明を求めたという自然観から生じたものである。そして歴史をくだって納西族の天体崇拜に結びつき、東巴経に発展していったというのである³。

諏訪哲郎氏は、黒は北方から南下してきた遊牧民を、白は土着の農耕民を表しており、黒に対する白の優越は、納西族の母体が土着の農耕民であるからだと主張している。二千数百年以前より北方から南下した遊牧民は、ヤクや山羊の黒い毛皮を衣服にし、一方土着の農耕民は麻などの白い服を着ていたために、「黒い人」「白い人」と認識されていた。牧畜民は少数であったが武力的に優勢であったため、唐の時代までには牧畜民による農耕民の支配が確立した。しばらく黒と白との対立が続いたが、融合・一体化の協調関係へと進み、やがて「白い人」も「黒い人」と称するようになった。これが《黑白戦争》の意味するところだと述べている⁴。

李麗芬氏によると、黒はカラスの濡れ羽色、蟻の様な真っ黒を意味し、白とはホラガイのようなオフホワイトを意味していると言う。そして黒は悪・暗黒を、白は善・光明を象徴している。東巴経では、万物の形成・誕生には白、破壊には黒を以て描写し、神と神に関するものには白、善人と善人に関するものにも白を使用するが、鬼と鬼に

関するものには黒を使用している。これは、神と鬼の区別を白と黒とを用いてははっきりと区別するためであり、他に社会的に相反するものについても同様に白と黒が修辭的に用いられている。納西族の祖先は光の現象から外面的に白と黒を認識し、やがて内面的本質から善と悪とを意味するようになった。それは原始宗教活動にも深く結びついており、神と鬼といった二項対立的な認識は納西族にとって極めて重要な事柄だったに違いないと説明している⁵。

王元鹿氏も李麗芬氏のように黒を修辭的な角度から研究している。王氏の調べたところによると、「黒」には炭・瘦せた・物が言えない・苦渋といった意味／悪を意味するものの記号／会意文字として苦・毒等の意味／形声兼義の黒＝大という四つの使い方に類別される。こうしてみると「黒」には「大」の他には鬼・毒・悪・苦・坏・下流といった意味にしか使われていない。これは納西族が白を賛美し、黒を忌み嫌う伝統を持っていたからであり、《黑白戦争》の描写・結果はその現れであると述べている⁶。

白庚勝氏は、確かに《黑白戦争》の中では白が光明、黒が暗黒といった解釈が読み取れるが、納西族は彝族のように元々は黒を崇拜する民族であったと主張している。黒を崇拜する文化は、まだ羌系の中に居た頃の原生文化であり、北方での遊牧生活の信仰に基づいていたものである。一方白を崇拜する文化は、納西族が分離独立した後の次生文化であって、西南地域に定住し農耕生活を営み、ボン教や仏教の影響下に従来の原始巫教の基盤の上に創造された。すなわちそれが東巴教なのである。例えば仏教の影響によって黒から白に崇拜の色が変化したチベット族や羌族のことも交えて論証している⁷。

趙櫓氏は、《黑白戦争》の初めの部分で五行の五色が生まれ、また《創世紀》にも五色の誕生が描かれている。五行における白・緑・紅・黄・黒の五色にはそれぞれ様々な意味があるが、強いて白と黒が独立して対立を意味するようには記述されていないと論じている。あくまでも五色

の中の二色であり、《黑白戦争》は黒いシュウ族と白いド族の対立よりは呪術による防衛戦の描写に重点が置かれている。つまり、ド族がシュウ族に勝利したという結末は善悪の判別がついたのではなく、それは宗教的な派閥の争いであり、具体的にはボン教の黒教とチベット仏教（紅教派）の白教が争い、チベット仏教（紅教派）の白教が勝利したという解釈が正しいと主張している⁸。

以上六人の見解を整理すると、《黑白戦争》の中では黒は暗黒・悪を意味し、白は善・光明となり、最終的に白が黒に勝利するという話が納西族にとってどのような意味を持っているのかという点が少々異なる。楊福泉氏・李麗芬氏はほぼ同じように、黒と白のシンボルは暗黒と光明であって、古代納西族の自然認識から発展したものだと述べている。多くの納西族研究者が納西族は昔から白を崇拝してきたと述べている中で、白庚勝氏のみが白を崇拝する以前に黒を崇拝していた文化が存在していたと主張している。修辭的には李麗芬氏・王元鹿氏が述べているように「黒」には鬼・毒・悪・苦等好ましくない物事に対して使われている。黒は暗黒・悪を意味し、白は善・光明を意味し、白が優位に立つという思想は、ボン教や仏教の思想が影響が大きいというのは白庚勝氏と趙櫓氏であるが、趙櫓氏はあくまでも五行五色の中の白と黒だと述べている。

実際に東巴経の《黑白戦争》を読んで解析したわけではないので、どの解釈が正しいのか筆者がここで断定することは出来ない。一般に納西族は昔から白を崇拝していると言われ、多くの研究者はそう解釈している。しかし、以下の点で筆者は疑問を抱くのである。

先ず白を崇拝することは、本当に納西族本来の伝統なのか。楊福泉氏、李麗芬氏、王元鹿氏は納西族が元々持っていた伝統と見なしている。しかし古羌人は3系統に分かれており、納西族の属していた旄牛羌は黒を崇拝していた。その中心は彝族であり、納西族も黒を崇拝していた可能性が高い。特に楊福泉氏は北方遊牧民である古羌人からのものと考えているが、白庚勝氏によると、羌族

は今でこそ白を意崇拝しているが、任乃強氏の「羌族源流探索」によると羌族も黒を高貴で尊い色としていたと述べている⁹。確かに歴代北方騎馬民族は白を崇拝していたとして知られているが、遊牧民であった古羌人は白を崇拝していたのであるうか。古羌人の3派のうち北の2つは白を崇拝していたとあるが、これは北方の騎馬民族の影響をうけた文化とも解釈できよう。その一方で一番南の旄牛羌は北方の騎馬民族に接する機会が少なく、黒を崇拝する独自の文化を保ってきたのではないだろうか。いずれにせよ羌族系の民族が全て白を崇拝していたとは限らないのである。

また、納西族の象形文字や表音文字が7～8世紀に出来たとすれば、既に後に述べるギュルボン（後期ボン教）や南詔統治下に仏教の影響が及んだ時期にある。修辭的に「黒」を分析してもそれ以前の「黒」の観念は分かるまい。7～8世紀には、「黒」は暗黒・悪を意味する言葉となっていたであろう。つまり象形文字の成立以前は現在とは異なった意味があったかもしれないのである。

趙櫓氏の言う五行五色の黒と白にすぎないと言う考えにおいて、陰陽五行は漢族系、「黒一白」の二項対立的な考えはチベット系の思想であるゆえに、五行における五色のそれとは全く違うレベルの問題であり、きちんと区別するべき点であろう。

私は黒を崇拝する文化が以前に存在していたとする白氏の論に大方賛同するが、次に筆者なりの根拠を次に挙げておこう。

3. 黒を崇拝する文化の存在していたとする根拠

(1) 「黒い人」

納西族の「納西」という名称にも「黒」の問題が存在している。「納西」は自称であり決して漢民族の付け名前ではない。自称であるからこそ「納西」には特別な意味が有るに違いない。方国瑜氏、ロック氏、白庚勝氏らの解析によると、「納」は固有名詞で「大きい」の意味を持っており、口語的には「黒い」という意味も含まれてくる。そして「西」とは「人」の意味であり、すなわち「納

西」とは「黒い人」ということになる。方国瑜氏は「黒」が悪・暗黒を意味しているので、「納西」とは「大きく偉大なる人」という解釈に改めているが、民族の自称は実際の人々の中に生きているものであるから、口語的な解釈に沿った「黒い人」こそ「納西」の意味するところではないだろうか。

ではなぜ「納西」と自称しているのだろうか。「黒」に限らず色彩は視覚で捉えるものであるから、納西族は視覚的に黒い特徴を持っていたとも考えられる。

(2) 「優軛」の黒

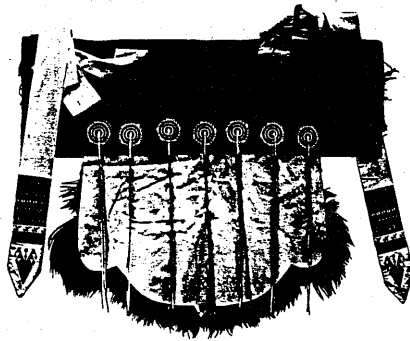
現在、納西族（麗江）を代表する民族衣装として「優軛」と呼ばれている。「優軛」のは黒い羊の皮をなめして加工してある。確かに黒い羊の皮を使用しているため、視覚的に黒い特徴を持っていると考えたくなるが、「優軛」は以前から黒いのであろうか。漢族の文献には、納西族の身にまとっていた衣服が次のように記述されている。

- ・『蛮書』巻4：磨蛮，亦烏蛮之種類也。……
…終身不洗手面，男女皆被羊皮，俗良酒歌舞。
- ・『滇黔志略卷』15：男子衣冠悉從漢儀，婦女髮結高髻，戴黑漆帽，耳墮大環，短衣長裙，復以羊皮。
- ・『維西見聞紀』：嚴寒則復背以羊皮。

下線部に有るとおり、納西族は羊の毛皮を背中にかけていた。しかしこの毛皮が理由で「黒い人」と名乗ったとは言いがたい。もしそうであったなら、漢籍資料には納西族の最も特徴的な「黒羊皮」と記述されていたであろう。今日の「優軛」がそうであるように、毛を中に向けていたら視覚にとらえづらいのである。よって視覚的な理由から「黒い人」と自称していたとは断定できない。だが、仏教のように「黒」を悪のシンボルと捉えていたら、わざわざ黒い毛皮を選ぶはずがない。白族の様に白い毛皮を使っていたであろう。

(3) 「西南夷」と「薄緑夷」

附国者蜀郡西北二千余里。即，漢西南夷也。
有嘉良夷，即，其東部所居。種姓自相率領土。



資料1 「優軛」

俗与附国同。言語少殊，不相統一。其人並無姓氏。附国王字宜繪。其国南北八百里，東西千五百里。無城柵，近川谷傍山險。……
嘉良有水，闊六七丈。附国有水，闊百余丈。並南流。用皮為舟而濟。附国南有薄緑夷。風俗亦同。西有女国。其東北，連山綿亘數千里，接於党項。往往有羌大小，……

上記の『隋書』八十三の部分によると、金沙江の上流地帯に朝貢した「ピャー国(附国)」があり、その南方東よりに「西南夷」，南には「薄緑夷」がいたと記されている。それらの風俗はボン教を信仰するピャー国と似ていると書かれている。前者には「ロロ」と呼ばれる「カロ」部族に属するものと「嘉良」夷がいて、言語が異なる各民族ごとにとままとっており、《Lolo, Moso》の先民と考えられる。後者は忠実なボン教徒であったため、吐蕃を築いたヤルソン王家ではないか。そしてピャー国が金沙江の上流地帯であることから、その南東の「西南夷」は現在の塩源あたり，南の「薄緑夷」は丁度納西族のいる麗江から怒江周辺にあたと山口氏は解釈している¹⁰。納西族は地図に示したように、この塩源から麗江にかけて分布していたので、納西族はピャー国の人々と風俗が似ていたことは間違いなからう。

忠実なボン教徒である「薄緑夷」がヤルソン王家であったならば、納西族はその近隣にあり、「薄緑夷」のボン教の影響を受けないはずがない。「薄緑夷」の存在は仏教の入る以前であり、従っ

てボン教は黒を崇拝するドゥルボン・キャルボンであったに違いない。つまり納西族の北には黒を崇拝する「薄緑夷」、東の方にも同じく黒を崇拝する彝族が存在していた。南には白を崇拝する白族が存在していたのだが、納西族は彝族と共に南下した民族なので、白ではなく黒の文化を持っていた可能性の方が高いといえよう。

(4) ドゥルボン（ボン教初期）と東巴教

東巴教がボン教とチベット仏教に多大な影響を受けたことは前に述べた通りであるが、ここではボン教について軽く説明しておきたい。

ボン教はチベット土着の原始宗教といわれるが、一般に10世紀前後の混乱期に仏教ニマ派の教義をまるっきり正反対に作り変えて習合していたもので、後のボン教徒の言うままに伝えたものを指す。トゥカンラマ三世トゥカン・ロサン・チューキ・ニマ（1737～1802）の『宗教水晶鏡』によれば、ボン教の流れには次の三段階があったとされている。

※山口瑞鳳氏はボン教を「ボン教」として扱っているのでそれにならうこととする。

- 初期（ドゥルボン）—— 下は魔や半神を制圧し、上は長寿の神を祀り、家庭の幸福を願う程度のもの。黒を崇拝している。山口氏の説明によると、生きている間は「霊神」（ラ）を祀り、各種の魔神ドゥー、スイン、ルらの障害を制し、死しては犠牲の協力を得て、つつがなく永遠の死者の国に至り、先亡の親族と楽しく不死を享受する。
- 中期（キャルボン）—— 従来のボンを殺害者の意味で呼び、特に犠牲を捧げる儀礼をよく行っていた。黒を崇拝している。
- 後期（ギュルボン）—— 9世紀あたりの仏典が一時期禁じられた後、11世紀ごろ復活して広まったもの。これが今日で言うボン教の原点になるが、既に仏教の一派としての性格を身につけている。仏教の影響を受け、白を崇拝するようになった。東巴教の始祖“丁巴什羅”は、ボン教の始祖の納西語訳“トンバシロ”に当たり、この後期ボン教

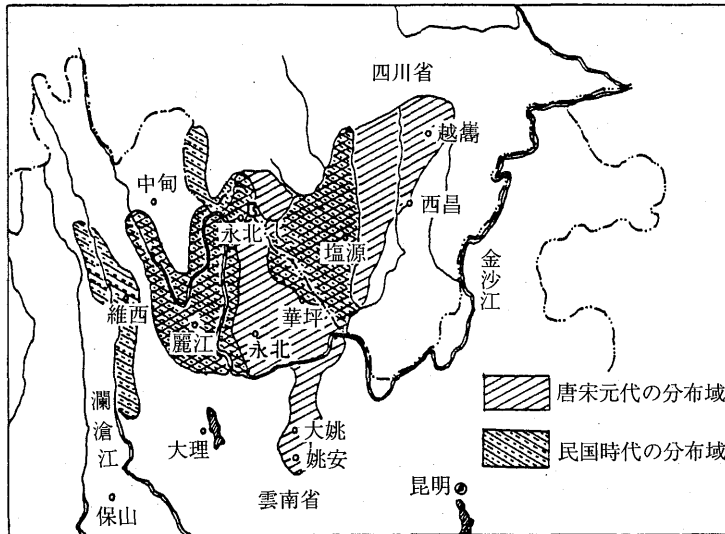
の始祖“シュンラブ・ミポ”を指す¹¹。しかしこれは本来の始祖ではなく、従来のボンに対立する「犠牲を捧げる人」というチベット語だという。

一般に納西族に多大な影響を与えたボン教とは後期のギュルボンと見られているようだが、東巴教の性質からドゥルボン（初期のボン教）とは少なからぬ共通性が見出せるようだ。万物有霊的な考え方、死後は祖先の国へ帰ってゆく性質及び巫術による儀礼、これらはまさに東巴教の特徴に一致する。そして祖先の国へ旅立つ際に馬を犠牲を捧げる点においても、ドゥルボンと東巴教は同様に、馬は死者の靈魂を導いてゆくとものだと考えている¹²。この共通性をないがしろにしてはなるまい。つまり、ドゥルボンこそ「黒」を崇拝している宗教であり、納西族の原始宗教も黒を崇拝していたとも考えられる。そしてボン教は仏教の影響を受け、黒から白の崇拝へと変化し、納西族もまた同じ変化をたどったと考えても良いのではなかろうか。

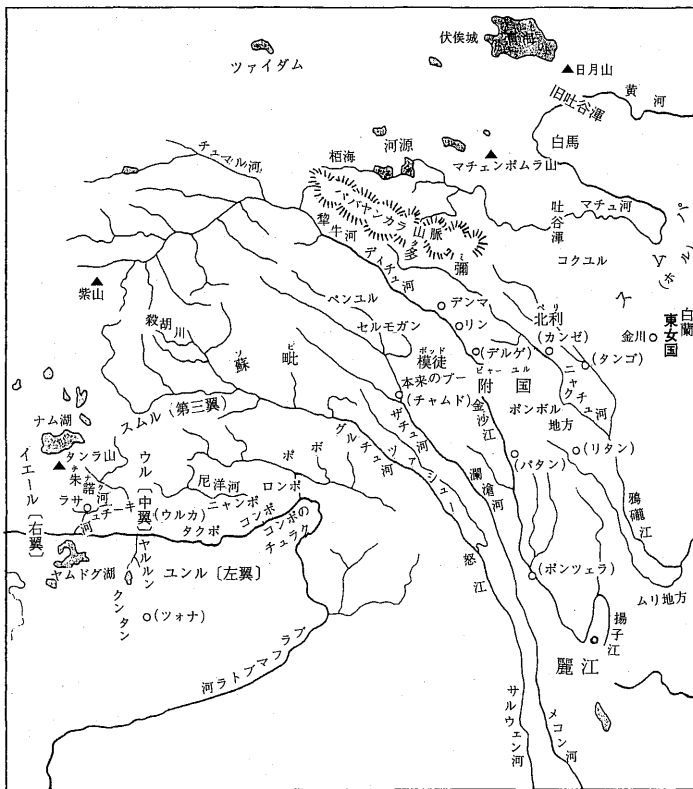
(5) 「黒」から「白」へ

チベットで広く信仰を集めていたボン教でさえも仏教の勢力には屈し、黒を崇拝していた初期のドゥルボンと中期のキャルボンから、白を崇拝する後期のギュルボンへと移ったのである。この事件に関する話が敦煌文献に残されている。それによるとチベットでは次のような転換がおこったようだ。

以前の〔犠牲の〕羊は、黒い人の教義、黒い葬式の流儀、「果てなきボン」の解くところ、魔の主張の筋によると、人よりも羊が賢いばかりでなく、人よりも能力が大きいと〔示されて〕いるけれども、有情はすべてそれぞれの業のよって導かれるから〔今さら〕羊によって〔死後の〕道を導かれる必要はない。羊によって〔その蹄で死後の道の〕岩を砕かせる必要はない。羊に道案内をさせることは不可能であり、羊によって考えさせることは不可能である。指のない手が矢を射ても当てることのできないこと〔犠牲を殺すことの無意識〕を誰もが歴然としたことと確信することに



図表2 納西族の移動図



図表3 チベット東部の地図

よって、白い仏教の教義、白い人の流儀、白い葬儀、〔つまり、〕白い仏教に依らねばならない。……略……位階は鋭い角、体は威厳あって善し、そのような野ヤクが、〔この〕黒い葬儀の魔の案内をするであろうか。悪鬼の悪しき法のもろもろは、悪しき法にふさわしく捨てよ。体の垢のように洗い浄めて、仏の白い法の教義のうちで、吉祥のますます善き〔法〕に依って、悪しきものを思うな。¹³

ここにはキャルポンの生贄による従来の信仰に依るべきではないこと指摘し、仏教の教義を勤める内容がのべられている。この仏教の勢力によって、納西族の間においても全く同じような転換があったとしても容易に理解出来ることであろう。

3. 納西文化の重層性

納西族は一般的に白を崇拝していると言われている。しかし、納西族が昔から白を崇拝してきたという証拠は挙げられていない。納西族の研究は東巴経から始まり、東巴経が全てであると言っても過言ではあるまい。多くの研究者が納西族は白を崇拝していると述べてきたこともここにある。確かに東巴経では黒よりも白の方が優位に置かれているかもしれない。しかし私は、納西族は白ではなく黒の文化を持っていたと考えている。その理由を挙げてきたが、私は納西文化には三つの段階が存在していたと考える。

第1段階：原生文化。納西族も周辺の民族と同じように、黒を崇拝していた。黒を崇拝するドルボン・キャルボンとは言わないまでも、それによく似た巫儀を行う原始宗教を信仰していたと思われる。7～8世紀になるとチベットのドルボン・キャルボンは仏教におされ、麗江などの周辺の地にボン教徒が逃げ、土着の原始宗教を融合した。これが東巴教の土台となったのである。

第2段階：仏教文化の導入。7～8世紀以後、麗江の地にも仏教の勢力が広がり、黒の文化を飲み込んでいった。東巴経の書かれた時代は11世紀中頃と言われ、納西族は麗江を中心と

し、発展を見せた時期にある。東巴教の始祖阿明什羅は、チベット仏教を深く学んだ人物と見られ、そのような状況に成立した東巴経自体、チベットのかなり高度な知識レベルのもとに生み出された物であれと言える。彼が民衆文化を収集して作った東巴教は、高度なレベルを下げることによって、一般の人々が容易に理解できるように製作されたに違いない。チベット仏教的な高度な思想体系を分かりやすく作り直す必要性があった。文字を知らない人のために分かりやすい象形文字を使用し、複雑な思想を民間の神話・伝説・伝承に結び付けることで、人々に親しみやすいものにしたのであった。

こうして確立した東巴経には、仏教的に白を崇拝する思想が全面的に押し出され、白の優位が東巴教の普及を通して民間に浸透したと考える。第一の転換期は白庚勝氏の言うように、白の優位が最も強く表現されている《黒白戦争》の書かれた時だったのではなないだろうか。そして第二の転換期である13世紀、チベット仏教が勢いを増したモンゴルの支配下に、納西族は白の優位が確立したと考える。

第3段階：漢文化の導入。14世紀、納西族は明と結びつきが深まっていく中で、漢族の道教・陰陽五行等も取り入れた。陰陽五行は「精威五行」¹⁴として東巴経にも記されている。この時点において、今までのコスモロジーが現在のものに変化したと見られる。例えば、《盤珠沙美女神》の中で「人間はお経に従って真っ黒な羊の皮を剥ぎ、カエルの形に合わせて裁断し羊の皮を作った。……五方をずらして斜めにかけたところ、全く新しい秩序が生まれ、万物が全て順調に進むようになった。」¹⁵とある。これは、陰陽五行説が納西族に入ったことで、納西族の世界観・世界の秩序が変化したことを意味している。また民間伝承の歌にも、五行を知ることによってこの世の秩序が定まったとある。

東巴経には他にも転換期と思われる部分があるのであろうが、東巴経の翻訳がまだ終わっていないので、今後納西族のカラーシンボリズムやコスモロジーが転換した痕跡が発見されることを期待している。

5. 考 察

では、あれほどにも勢いのあった「白」が優位の仏教の流れに飲み込まれず、何故、納西族の「優軛」の黒い羊の皮、そして「黒い人」＝「納西」という自称名が残ったのか。それはドゥルボンがそうであったように、納西族の従来持っていた原始宗教が邪悪な魔を鎮め家庭の幸福を願うものであり、生活の中に生きる宗教であったからである。その黒を崇拜する思想と、黒い羊やヤク・馬を生贄にする儀礼、また羊も人々にとって非常に大切なものであったことから、黒い羊の皮を被り魔から身を守ったのかもしれない。その名残が現在の民族衣装の「優軛」と「納西」という民族名に現れているのである。つまり、黒を崇拜する宗教が非常に民衆レベルの性格を持っていたからなのである。

一方、生まれ変わってできた東巴教は非常にレベルの高い宗教であった。そして一時は政治を左右するほどにも勢力をふるったが、民衆文化はそう簡単に衰退するものではなかった。納西族の人々の間にすっかり根を下ろしていた黒の文化が、民族衣装の「優軛」と「納西」という自称名に残り、現在においてもかつての文化を語り伝えているのである。

今回筆者は文献による研究を行い、納西文化の重層性を述べてきた。その結果ははっきり言えることは、納西族の本当の研究を行うなら、納西族の民衆文化を調査すべきだということである。今までの納西族研究は東巴経が全てだったと言えるほど、東巴経に目が向けられてきたが、東巴の激減した今日では研究の方向を修正する必要があるであろう。恐らく民俗調査をもっと行ったなら、東巴教とは異なる納西族の民衆文化が浮かび上がってくるのではなかろうか。

注

1. 光嶋督著 1985 『ボン教・ラマ教による吐蕃の研究』 p. 24 成文堂
2. 白庚勝 1991 「《黒白戦争》象征意義弁」郭大烈・楊世光主編『東巴文化論』 p. 495～p. 506 雲南人民出版社
3. 楊福泉 1991 「東巴経中の黒白観念探討」郭大烈・楊世光主編『東巴文化論』 p. 470～p. 481 雲南人民出版社
4. 諏訪哲郎 1988 『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』 p. 217 学習院大学
5. 李麗芬 1991 「“黒” “白” 詞彙及其文化背景」郭大烈・楊世光主編『東巴文化論』 p. 482～p. 494 雲南人民出版社
6. 王元鹿 1986 「納西東巴文字黒色字素論」『華東師範大学学报』 1. p. 59～p. 63
7. 白庚勝 前掲論文 1991
8. 赴櫓 1991 「論《東埃術埃》の宗教思想」郭大烈・楊世光主編『東巴文化論』 p. 507～p. 520 雲南人民出版社
9. 任乃強「羌族源流探索」については 白庚勝前掲論文 1991 を参照した。
10. 山口瑞鳳 1983 『吐蕃王国成立史研究』 p. 215～p. 225 岩波書店
11. 和志武 1989 『納西東巴文化』 p. 41 吉林教育出版社
12. 山口瑞鳳 1988 『チベット』 下 p. 149～p. 156 東京大学出版会
13. 山口瑞鳳 前掲書 1988 p. 161～p. 168
14. ここでは李国文1991『東巴文化与納西哲学』 p. 155～p. 157 雲南人民出版社にない、「精威五行」という呼称を使用した。
15. 木麗春 1985 「納西族的図騰服飾——羊皮」郭大烈・楊世光主編『東巴文化論集』 p. 265～p. 267 雲南人民出版社